

普段なら絶対に立ち寄らないはずの、古いレンタルビデオ店。私は誰かに見られていないか何度も周囲を伺いながら、その「場所」に足を踏み入っていた。

黒い遮光カーテンの先。薄暗い照明に照らされたアダルトコーナー。派手なパッケージが並ぶ棚の前で、私の心臓はうるさいほど脈打っている。

元々こういうビデオに興味があって、ひとつくらい見てみたいと思ったけれど、ウェブで買うと履歴が残る。そういった履歴を残したくない私は、アナログ店に来ていた。

(……早く、選んで出なきゃ。もし、知り合いにでも見られたら……)

震える指先が、ひとつのタイトルに触れた。その時だった。

「——お探しのものでしたか？ それ」

背後からかけられた、耳に心地よい低い声。

全身に電気が走ったような衝撃を感じ、私は弾かれたように振り返った。そこに立っていたのは、この店の店員と思われる、一人の青年だった。

黒髪が清潔感を感じさせる、驚くほど整った顔立ち。紺色のエプロンには『司波』というネームプレートがかけられている。歳は二十歳そこそこに見えるけれど、理知的な雰囲気を持つイケメンだ。

「あ、いえ、これは……その、たまたま手が……」
「そうですか。たまたま、ですか」

司波というらしい店員は、自分でも苦しいと思った言い訳を遮るように、一步踏み込んでくる。逃げようと視線を泳がせた私から、彼は視線を逸らさなかった。

「入り口のカーテンをくぐる時から、ずっと見ていましたよ。あっちの棚で足を止め、こっちの棚でタイトルを凝視して。……最後には、その一番過激な

内容のものを選んだように、見えますが」

「……っ！」

羞恥で頭が真っ白になった。初めて入った店で、名前も知らない店員に、自分の挙動を最初から最後まで「観察」されていた。

「そんなに恥ずかしがらなくてもいいと思いますよ。何を借りるかは個人の自由ですから」

彼は私の手から、握りしめていたパッケージを無造作に取り上げた。長い指先が、そこに踊る卑猥な文言をなぞる。その所作があまりに静かで、かえって私の惨めさを抉るようだった。

「あ、あの、こ、これは、会社で資料として、使うもので……」

再び言い訳をこぼした私を、店員である彼は面白そうに見た。

「そうなんですか。こんな過激なものを、会社の資料で使うんですね」

「えっと、ええ、まあ……」

「でも会社の資料でお使いになるなら、中身がわからないと大変ではないですか？ よろしければ、奥の部屋を使ってください。今はちょうど他にお客もいませんから」

「え、あ、あのっ」

「こっちです」

彼は私の腕を掴んだ。細身に見える指先には、拒絶を許さない圧倒的な力がこもっている。そのまま連れて行かれるのは、スタッフ専用と書かれた重い扉の向こうで、バックヤードだった。

バックヤードの中は、テーブルと椅子が中央にあり、壁側にはロッカーと、ソファ。そしてDVDデッキと小型のモニターが置かれていた。

「そのソファ、座っても大丈夫ですよ」

モニターの電源を入れながら、彼は、ごく自然な調子でそう言った。

「あ、あの、司波？ さん……」

「はい、なんですか？」

モニターを見ていた彼が、振り返って私を見た。

「あ、あの……やっぱり、急用を思い出して。また今度、出直します……っ！」

「急用？ でも、先ほど『会社の資料として重要だ』と仰っていましたよね。仕事なら、中身を確認した方がいいですよ。だって、お仕事ですもんね？」

「そ、それは……あの……」

「いい仕事ができるよう、僕も協力したいんです。……ほら、もう再生が始まりますよ」

そう言われ、私はソファに腰を下ろす他なかった。カチリ、と司波さんがリモコンを操作すると、小型モニターに鮮明な映像が映し出された。静まり返っ

たバックヤードに、突如として若い男女の話し声が響く。

再生されたのは、背徳感に満ちた「大学サークル」を舞台にしたビデオだ。

画面の中では、放課後の蒸し暑い部室、露出の多いチア部のユニフォームを着た女の子が、数人の男子学生に囲まれている。

『ねえ、合宿の費用、足りない分は……体で払ってくれるんだよね？』

『あッ♡ や、やめてえ……ッ！ 誰か来ちゃう……ッ♡♡』

（うわ、どうしよ、これ本当に全部ここで見ないといけないの……？）

冷たい汗が額から一筋、頬を伝って流れ落ちる。バックヤードの冷房は効いているはずなのに、私の体感温度は異常なほどに上昇していた。

（恥ずかしい、恥ずかしくて死んじゃいそう……っ。

でも、ここで目を逸らしたら、司波さんに『やっぱり嘘だったんですね』って言われちゃう……！)

私の焦りなんてお構いなしに、モニターの中の物語は残酷なほどスムーズに進んでいく。

『ほら、脚閉じるなよ。合宿費、払えないんだろ？』
『あッ♡ ひ、ひいっ……っ！ や、両方……っ！！
♡♡』

画面の中では、男子学生の一人が女の子のチアトップスの裾を強引に捲り上げ、露わになったおっぱいに指を這わせている。さらにもう一人の男が、彼女の短いスカートの奥へと手を滑り込ませた。

『ひっ……あッ♡ やだ、おっぱい……そんなに強く、捏ねないでえ……っ！♡♡』

画面の中では、男子学生たちが彼女のチアトップスの隙間から手を滑り込ませ、露わになったおっぱ

いと乳首を無遠慮に揉みしだいている。親指と人差し指で尖った乳首をコリコリと執拗に弾くたび、彼女の腰がビクビクと跳ねた。

「大丈夫ですか？ なんだかあまり集中できていないようですが」

「あ、い、いえ……そんな、ことは……」

「これは『お仕事の資料』なんですから。ほら、しっかり見ないと」

「……は、い……。そう、ですね……」

一方画面では、今度は女の子の下半身がアップになって映っていた。

『あッ♡ あぁんっ！♡♡ そこ、ショーツの上から……擦られるの、変な感じい……っ！♡♡ ぐちゅ、ぐちゅって……音がぁ……っ！♡♡』

一人の男がショーツのクロッチを手のひらで押し潰し、円を描くようにぐりぐりと愛撫する。そのた

びに、真っ白な布地がじわじわと、透明な蜜で色を変えていく。

（あ、ああ……っ。ショーツが、あんなに濡れて……っ。音が、ぐちゅぐちゅ、じゅるじゅるって……っ♡）

『あッ♡ あ、ああっ！♡♡ すごい……っ！ 指が、ナカに入ってきて……っ！ あひいっ！♡♡ ぐちゅぐちゅ、掻き回されてるぅ……っ！♡♡』

（うそ……、あんなに乱暴に。でも、彼女の顔……すごく、気持ちよさそう……っ♡）

『あッ♡ あ、ああっ！♡♡ すごい……っ！ おまんこのナカ、三本も指が入ってきてえ……ぐちゃぐちゃに掻き回されてるぅ……っ！♡♡』

画面の中の女の子は、もはや羞恥心をかなぐり捨てたように、淫らな声をあげていた。

『ひいっ♡ 指の関節が、ナカをゴリゴリ擦ってる

う……っ！♡ 熱い、熱いのおっ！♡♡ ぐちゅぐちゅ、音がしてる……おまんこ、壊れちゃうくらい……あひいっ！♡♡』

モニターからは、彼女の言葉を裏付けるような、激しく湿ったぐちゅ♡ じゅるり♡ という音が絶え間なく響いている。男たちの指がナカを激しくかき混ぜるたびに、彼女の腰が大きく跳ね、ユニフォームの裾が乱れる。

(……だめ。見てるだけなのに、頭が、おかしくなりそう……っ。……想像するだけで、私のナカまでキュンキュンして、熱いのが溢れてきちゃう……っ♡)

私は無意識に太ももをギュッと擦り合わせ、膝を震わせた。ショーツのクロッチが、自分でもはっきりとわかるくらい重く、熱く湿っているのが分かる。

「やっぱりあまり集中できていませんね？」

「えっ！」

急に声をかけられ、びっくりと肩が揺れた。隣を見ると、司波さんが神妙そうに私を見ていた。

「そうだ。実際にビデオと同じことをするのはどうでしょう？ そうすると一体化できて、よりお仕事が捗るのではないのでしょうか？」

「い、一体化……って？」

（ビデオと同じことをするって……。あの、女の子がされているみたいに、私もされるってこと……？）

心臓の鼓動が耳元まで響いて、頭が真っ白になる。

よくないことだとはわかっているのに、ビデオから聞こえてくる嬌声にごくりと喉がなってしまう。そのあと、司波さんが笑みを深めたような気がした。

「会社の資料として、必要ですもんね？」

そう言いながら、司波さんの長い指が私のスカー

トを捲り上げ、湿りきったショーツの中へと迷いなく侵入してきた。熱を持った秘部をなぞるように、ゆっくりと指先が動き始める。

「……あれ。もうこんなに濡れていますね。もしかして、期待していました？」

「あ、ち、ちがっ……」

（は、恥ずかしい……っ！！何もされていないのに、私、濡らしちゃってる。それを司波さんに知られちゃってる……♡）

モニターから流れるビデオの淫らな喘ぎ声と、バックヤードの異様な熱気。司波さんの体温が、すぐ隣から逃げ場を奪うように伝わってくる。

司波さんが割れ目をつー、と何度も上下に撫でる。

「……っ、あ、あ、っ、ん、んうっ」

すり♡すり♡すり♡